

中原悌二郎の 写真コレクション(四)

武井 敏

今回もひきつづき、中原悌二郎(二八八八—一九二一年)が収集した写真コレクションのうち「日本古代寺院」十四点、「日本仏教造形物」六点、「東洋古代仏教造形物」一点を紹介する。残念ながらこれらについての関連テキストはほとんど見受けられない。中原本人のこれらについての言及は前者についてのみであり、後二者については全く残っていない。したがって今回はそのわずかな言及を紹介するとともに、中原がその際にふれる「信仰」についての若干の考察を記したい。

中原本人が日本の寺院建築について語るのには、管見の限り伊藤信に宛てた二通の手紙(一九一七(大正六)年五月十六日付、一九一八(大正七)年五月十三日付)のなかだけである。まず一九一七年の手紙から。

昔の人間は熱烈な信仰を持つて居つた。それは製作が明かに語つて居る。けれども、近代の人間には信仰といふものがない。だから精神的な生活が廢頽を極めて居る。だから傑作が出来ない。信仰の対照は、時代と国民とによつて多少相違がある。けれども、根本に流れて居る生命は一つだ。

一時代の民族の信仰が、建築と彫刻とに象徴されて、現代に我々がその最大な記念碑を持つて居ると言ふ事は実に嬉しい。是等の建築と彫刻とは声高く我々に話しかける言葉だ。此処で我々は古代の人間が持つて居つた、憧憬と信仰とに面接することが出来る、彼等

と語り合ふことが出来る。是が実に芸術觀照の喜である。(傍線強調筆者、旧漢字を適宜改めた(以下同様))

その約一年後の一九一八(大正七)年五月十三日付の手紙の中で述べる内容もほぼ同じである。

新たに彫刻に対する面白味が加はると同時に、量りきれない自然の深さと神秘さとに面して殆ど手の下し様がなく、自分自身の無智と貧弱さとにあてもなく苦しめられる。古代の彫刻家達が神に対して持つた様な謙遜な愛情を以て、我々は自然に向はねばならぬ。(中略)現代の如く趣味の廢頽してゐる時代に於ては、芸術家は全くみじめなものだ。けれども我々は、さう失望しなくともよい。我々の民族に於てもかつては偉大なる文化を持つてゐた時代があつた。それは奈良朝時代だ。あの時代の文化が多く支那朝鮮を経て伝來したものであつたにしても、天平時代に至つては明かに日本的のものになつてゐる。それは大和民族でなければ作り得ない偉大さと秀麗さを持つてゐる。あの時代の文化が建築と彫刻とに結晶されて、我々が現代にそれを持つてゐるといふ事は、実に至上の幸福と言はなければならぬ。(傍線強調筆者)

これらにみられる中原の主張をまとめると、現代の人間には信仰がなく精神が頽廢しており、優れた芸術作品が生まれてこない。しかし奈良時代の日本人の信仰心とその時代の偉大な建築と彫刻とに象徴されている、ということになる。

一九一八(大正七)年五月の段階では奈良を訪れたことのなかった中原が、同年十月に平櫛田中、堀進二、石井鶴三と連れ立って初めて訪れ

た時の感動は、「君は歓喜の念を禁じ得なかつた」(平櫛)³、「君の古代彫刻、及び建築に対する年来の渴仰を満足せしめた」(堀)⁴、「君は至る処で子供のやうに喜んで居た」(石井)⁵という友人たちの言葉から想像に難くない。

また友人の佐藤朝山によれば「これから更に東洋芸術の彫刻、建築等の写真などを買い聚め又更に深く考へるやうになつた。是れから東洋芸術に対する見解も、大分以前とは違つて来やうであつた⁶」とのことであるから、この旅行後に写真を買ひ足していったようである。実際「日本古代寺院」の写真は奈良の寺院のものが大半を占め、中原の奈良への関心の高さがうかがえる。二度目の奈良旅行では同行した石井が唐招提寺の金堂の傍の草地に腰を下ろして、建築に見入つた時の中原の漏らし「い、建築だな」との感想を伝えて⁷いる。

建築や彫刻をはじめとする芸術作品は単に表現されたものではなく、信仰というような人間の精神と無関係でないという中原の考え方は、先に引用した彼の「近代の人間には信仰といふものがない。だから精神的な生活が廢類を極めて居る。だから傑作が出来ない」という言葉に端的に示されていよう。芸術作品と信仰を関連付ける中原の考え方は、一九一五(大正四)年頃と推定されている「自分自身」のなかの「僕は自分の芸術を何うかして宗教的な深さにまで至らしめ度いと思つてゐる。それには自分自身が先づ嚴肅な生活を営まねばならぬ⁸」という言葉にすでに現れている。実際この頃から中原の生活が無頼なものから嚴肅なものへとがらりと変わつていったことが知られている。

中原にとつての信仰は、残る資料を見る限り、仏教やキリスト教といった宗教ではなく、岡田虎二郎の静坐法であつたのだろう。それは、一九一七(大正六)年八月十四日付の信宛の手紙の「静坐によらなければ、眞の道を会得することが出来ないのだ¹⁰」や、一九二〇(大正九)

年十月の「自分の病氣及び身心修養法に就いて」における「私は、呼吸法及び静坐法の眞理を深く信じて居ります。(中略)私は此の眞理に深く信頼して居るので、此の一路を歩むことによつて、自分自身の生命を充実させ得ると信じて居るので御座います。(中略)私の静坐法の修養は単に病氣が治るとか治らないとか言ふ問題よりも、もう少し大きな問題が含まれて居るとつ思つて居るので御座います¹¹」という言葉からうかがい知ることが出来る。これらから、川上直也氏が述べるように「悌二郎は自ら信ずる静坐によつて、その生を、創造における希いを完遂した¹²」と言つてよい部分が多分にあるといえよう。

一九二〇(大正九)年の暮れ、病床の中原を酔いどれながら訪ねた佐藤は「死の影につ、まれてゐる」と感じながらも「こんなにおそろしく沈静無執着な」中原を見たことがなかつたという¹³。その際中原は「今は死ぬ生きるといふことが問題ではなくなつてしまつた。斯うしてゐて死ぬるのなら仕方がない。生きてゐる運命なれば、生きることになるだらう。今はその先を見てゐる。こゝに今全心をおくことが、現在の僕の全部なのだ。余のことはどうでもよいのだ。尤も科学が人生に必需なことも知つてはゐる。医術も必要には違ひない。が、もつとく、必用なものを今はわかつた。信仰の内部といふものは他からのぞくことは出来ないものだらう。言ふことも出来ない。こゝに信仰の内部がある。自分が自身で獲得しなければならぬのだ¹⁴」と語つたという。ここにおいて、中原は、信仰を自分自身で獲得したと明言できる境地に達していたにちがいない。

この佐藤の面会から三カ月のちの一九二一(大正十)年三月二十八日、中原は三十二年という短い生涯を閉じる。病苦のため制作に向かえなかつた日々は、一九一九(大正八)年十月に中途で終わった《平櫛氏像》からの約一年半になる。信仰を確かなものとし「その先を見て」い

た中原の脳裏に浮かんでいた制作は、実現することなく永遠に失われてしまったが、間違いなくわれわれを感動させるものであったろう。
なお、以下に紹介する写真の下の数字は順に「用紙の大きさ」、「図版の大きさ」である。

- 1 中原悌二郎「妻信に婚約時代に送れるもの」、中原信『彫刻の生命』アルス、一九二二（大正十）年、一六五頁参照。
- 2 同書、一七二―七三頁参照。
- 3 平櫛田中「中原君に就いて僕の知つて居る事」『彫刻の生命』（前掲書）、二六四頁参照。
- 4 堀進二「中原君に就いての追憶」『彫刻の生命』（前掲書）、二九四頁参照。
- 5 石井鶴三「中原君と私」、『彫刻の生命』（前掲書）、三二二頁参照。
この時の行程については武井敏「中原悌二郎の写真コレクション（二）」『碌山美術館報 第四三号』二〇二三（令和五）年、三七頁参照。
- 6 佐藤朝山「中原君との交遊」『彫刻の生命』（前掲書）、二四七頁参照。
- 7 石井、前掲書、三一五頁参照。
- 8 中原悌二郎「自分自身」『彫刻の生命』（前掲書）、二二頁参照。
武井、前掲書、同頁参照。
- 9 中原「妻信に婚約時代に送れるもの」『彫刻の生命』（前掲書）、一六九頁参照。
- 10 中原悌二郎「自分の病気及び身心修養法に就いて」『彫刻の生命』（前掲書）、五七―五八頁参照。

- 12 川上直也「中原悌二郎と岡田虎二郎―ものの真相にむけて―」『中原悌二郎と岡田虎二郎―自然の理法・悌二郎をめぐる作家達―』田原市博物館、二〇〇七（平成十九）年、一一五頁参照。
- 13 佐藤、前掲書、二五〇頁参照。
- 14 同書、二五一―五二頁参照。

日本古代寺院



③東大寺転害門
28.1×40.8cm 22.2×27.2cm



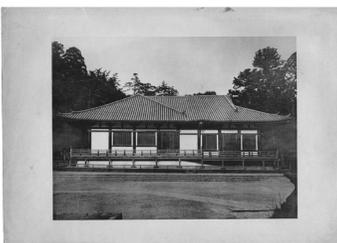
②唐招提寺金堂
27.8×40.1cm 21×27.3cm



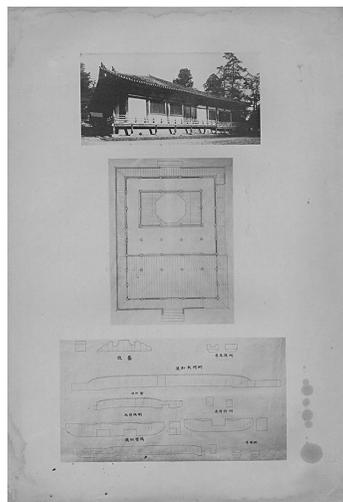
①新薬師寺本堂
28.1×40.7cm 21.1×27.2cm



⑥仁和寺金堂
27.4×39.2cm 19.1×25.1cm



⑤東大寺法華堂 2
28.1×40.4cm 21.1×28.3cm



④東大寺法華堂 1
40.7×27.6cm (用紙の大きさ)



⑨法隆寺五重塔
40.5×27.9cm 27.1×21.1cm



⑧法隆寺金堂
28.2×40.6cm 21.1×27.3cm



⑦法起寺三重塔
35×27.7cm 27×22.9cm



⑫法隆寺東大門
28.3×40.1cm 21.3×28.1cm



⑪法隆寺伝法堂
27.9×40.3cm 21.3×27.3cm



⑩法隆寺大講堂
28.1×38.4cm 23.5×29.2cm

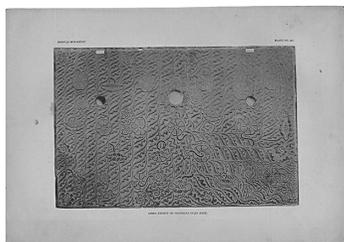


⑭薬師寺東塔 2
33.8×21cm 33.8×20.2cm



⑬薬師寺東塔 1
40.3×28.4cm 27.2×21.1cm

日本仏教造形物



③法隆寺伝橘夫人念持仏厨子基部
27.7×39.8cm 18.7×28.4cm



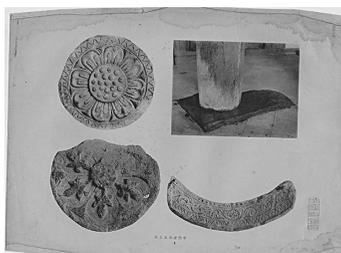
②鳳凰文磚 (壺阪寺)
40.8×28.1cm 19.2×18.9cm



①白石鎮子 寅・卯 (正倉院北倉)
16.4×25.4cm (用紙の大きさ)



⑥般若寺十三重石塔婆
40.8×27.8cm 25.1×21cm

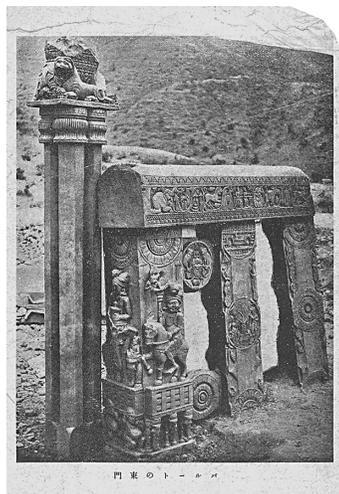


⑤法隆寺中門礎石及古瓦
30×39.4cm (用紙の大きさ)



④薬師寺東塔水煙
31.7×21.2cm 26.9×19cm

東洋古代仏教造形物



①パールフットの仏塔の東門
17.5×12.2cm 15.1×11.1cm